


高级日语教学参考

总主编 吴侃

第2册

 上海外语教育出版社
外教社 SHANGHAI FOREIGN LANGUAGE EDUCATION PRESS
www.sflep.com

高级日语教学参考



总主编 吴 侃
主编 王建民
编者 王建民
梁 暹 黄春玉

第2册

 上海外语教育出版社
外教社 SHANGHAI FOREIGN LANGUAGE EDUCATION PRESS

图书在版编目(CIP)数据

高级日语教学参考. 第2册 / 王建民主编. —上海:上海
外语教育出版社, 2013

ISBN 978-7-5446-2980-5

I. ①高… II. ①王… III. ①日语-高等学校-
教学参考资料 IV. ①H36

中国版本图书馆 CIP 数据核字 (2012) 第 289408 号

出版发行: **上海外语教育出版社**

(上海外国语大学内) 邮编: 200083

电 话: 021-65425300 (总机)

电子邮箱: bookinfo@sflep.com.cn

网 址: <http://www.sflep.com.cn> <http://www.sflep.com>

责任编辑: 应 允

印 刷: 上海信老印刷厂
开 本: 890×1240 1/32 印张 10.75 字数 304千字
版 次: 2013年6月第1版 2013年6月第1次印刷
印 数: 2100册

书 号: ISBN 978-7-5446-2980-5 / H·1454
定 价: 20.00元

本版图书如有印装质量问题,可向本社调换

前 言

《高级日语》自 2005 年 4 册全部出齐后，得到了广泛采用。现在特推出教学参考书，以便更好地服务使用者。

《高级日语》是日本国际交流基金的“日本語教育”项目的成果，与日本著名日语研究及日语教育专家村木新次郎教授合作完成。在项目进行期间，笔者与村木教授一起探讨了“高级日语”所应该包含的内容及达到的目标。最终确定，内容应该全面反映日本的社会文化，介绍日本社会、日本人的思维及行为方式的方方面面。题材的选择应该广泛，包括随笔、评论、报道、小说、相声、剧本等等。难度确定为：最初部分与国内大部分中级日语教材衔接，而最后一课达到日本大学入学考试的“国语”考题的难度，中间的课文难度呈阶梯式排列。按照这一想法，由村木教授组织了一批日语研究者（包括硕士生、博士生）收集课文素材。该项目在日本的共同研究阶段结束后，再由国内组织多校的资深学者进行编写，所有日语内容均由村木教授最后审核。

从出版后的情况及反馈的信息综合来看，当初的目标基本达到，未发现教材中存在明显错误的“硬伤”。但对于这样一部内容广泛、全面、具有足够深度的教材，要想吃透其内容并教授给学生，对教学者无疑是一个不小的挑战。

此次编写的这部教学参考书，主要就课文内容、表达等各个方面加上了注释，并全文翻译课文，以便教学者能够更加容易地、准确地理解课文，提高教学的准确性和教学效果。注释包括内容和语言方面，尤其是对于中国人理解起来难度较大的某些口语化的表达、需要与语境相关联考虑理解的表

达，以及含有古典语法的表达等，尽量做了详细的注释。课文翻译不考虑翻译技巧，尽量直译，以有助于理解课文原文句子。此外，编写了“课文背景”，以加深对与课文内容有关的日本社会文化内容的理解，并且加入了“扩展阅读”和“扩展练习”，供任课教师视需要选择使用。

吴 侃

2012. 1

目 录

第一課	蜂	1
第二課	日本語の表情	22
第三課	エチケット	46
單元測試 1		72
第四課	手作りのこま	79
第五課	インドの旅	100
第六課	危険な宇宙ゴミが9000個、天空を飛 んでいる	125
單元測試 2		149
第七課	つきあたり	155
第八課	小鳥の来る庭	178
第九課	故郷	206
單元測試 3		238
第十課	日本人氣質	244
第十一課	落語・三方一両損	265
第十二課	ふだん着・よそゆき	290
單元測試 4		315
擴展練習及單元測試答案		321

第一課

蜂

1 作者紹介

寺田 寅彦（てらだ とらひこ）（1878～1935） 物理学者・文学者。筆名は吉村冬彦。東京生まれ。高知県人。東京大学教授。地球物理学を専攻、身の物理現象の研究からは「寺田物理学」の名を得ている。夏目漱石の門下で、文学など自然科学以外の事柄にも造詣が深い。著作には、自然科学と人文科学の融合を試みた随筆、『漫画と科学』『科学と文学』『西鶴と科学』などが多く残されている。『寺田寅彦随筆集』（小宮豊隆編、岩波文庫全五巻）には、「どんぐり」「竜舌蘭」「花物語」「芝刈り」「球根」「簞虫と蜘蛛」「ねずみと猫」「子猫」「解かれた象」「からすうりの花と蛾」「藤の実」「とんびと油揚」「あひると猿」などが収録された。

2 课文背景

日本人にとって、自然はまさに「“友”としての自然」である。親密な関係を保ち、「人間と自然が一体化することで始めて自然と触れ合う事ができる」というのである。

「日本の自然界が空間的にも時間的にも複雑多様であり、それが住民に無限の恩恵を授けると同時にまた不可抗な威力をもって彼らを支配する。その結果として彼らはこの自然に服従することによってその恩恵を十分に享受することを学んで来た、この特別な対自然の態度が日本人の物質的ならびに精神的生活の各方面に特殊な影響を及ぼした。」と、自らそのような認識を持つ寺田寅彦には、「自然と生物」とい

う題を持ち多くものを書いてきた。作品に現れる生物はある種の点景として用いられ、その観察から得た着想を社会や歴史に敷衍していく。『蜂』では、庭に巣を造った一匹の蜂に対する観察を通じて、初めの何もなかった関係から親友となった感情にまで昇格させ、「人間と自然との同伴者関係」という日本人の自然観また哀感がつくづく感じられる。

3 课文注释

3.1 こんなところに蜂の巣があつてはあぶないから (P. 2、4行目)

「こんな」は特定指示の名詞句を作る機能をもつのは通常であるが、「感情的な評価」や「価値判断」を伴うニュアンスもある。本文の「こんな」はうちの中庭にある四つ目垣に蜂の巣があつて、絶対にあぶないと思う作者がびっくりしている感情の程度を表していると考えられる。

3.2 そろそろと自分の頭を今つくった穴の中へさし入れていった。 いかにも用心深くそろそろとからだを曲げて頭の見えなくな るまでさし入れた (P. 2、14行目)

「そろそろ」は、きわめてゆっくり移動することを意味するが、この二か所の「そろそろ」は、いかにも途中での失敗を恐れたり不十分なことを警戒したりしながら、慎重に巣作りをしている、その蜂の姿を生き生きと表現している。

3.3 強い好奇心に駆られて見ているうちに……なれなくなつてし まった (P. 2、18行目)

「うちに」はある状態・動作が継続している間に、別の状態・動作がしだいに動き始める場合に用いられるが、その時点において主体はそれを意識していないことを特徴づけている。本文の「うちに」は、文末の「なれなくなつてしまった」と呼応することにより、とうてい蜂の仕事が無残に破壊することができなくなったという作者の心境が何時の間にか、ごく自然に生じることをうまくとらえている。

3.4 しかしはたして、蜂がその本能あるいは智慧……というよう なことがあるものか、ないものか (P. 3、13行目)

「はたして」は文末の「……あるものか、ないものか」という疑問の語を伴って、ほんとうにそうであろうかということの意味する。つまり、作者はSの蜂が場所が悪いから断念してほかへ移転したという推測に疑問を持っている。

3.5 無造作に事務的に破ってしまった (P. 3、本文の下から11行目)

「事務的」は、事実に基づき学問の視点から論理的で合理的なように、Sが蜂のことを推測していることを言っている。しかし一方、それは、感受性に富んだ作者の心境と合わないことも表している。

3.6 オプチミストとペシミストの差別は現れる (P. 3、本文の下から9行目)

「オプチミストとペシミストの差別」は、「S」と「私」は蜂の移動について考え方の道筋が違ったことをさす。「S」は与えられた事実を踏まえ、結論を出す一方、「私」は常に幻想の世界に生き、ささいなことがらにも敏感に反応している。差別はそこに現れると思われる。ちなみに、感受性の豊かさと共に、科学的視点からの思考も持ち合わせることは、本文の趣旨でもある。

4 课文翻译

蜂

寺田寅彦

我家的院子，用一个较高的方格篱笆，隔成了东西两部分。东侧面对客厅、书房和上面二楼的一间榻榻米屋子。与之相对的西侧是内院，围起了三块：孩子们的房间、我的起居室和老人的房间。这个内院，仅在靠近篱笆处有一个小小的花坛，余下便是一个约三间（一间约1.8米）大的四方空地，这里是孩子们的玩乐场所，也是夏夜的乘

凉处。

方格篱笆上缠绕着野生的白蔷薇。而一到夏天，上面便爬满了牵牛花和菜豆，还有自然繁衍的土瓜藤蔓交缠，各色叶子，长得密密实实，几乎不留空隙。早晨，打开门，红色、深蓝色、浅蓝色、黄褐色，各种牵牛花齐聚开放，非常美丽。到傍晚，土瓜从草丛中探出花朵，迷雾般的淡淡花色，引来飞蛾逐香。蔷薇的叶子被遮掩着几乎看不见，但从篱笆的顶部伸出几棵长势旺盛的新芽，眼看着一天大似一天。它们也是和牵牛花、豆藤缠绕在一起，彼此不甘示弱，争先向上攀爬着。

在这长势茂盛的植物叶子中，一棵开始枯萎的蔷薇小枝上，垂下一个黑褐色的奇怪的东西。那是一个蜂窝。

记得我第一次看到这个蜂窝，是在五月底，篱笆上的白蔷薇已经凋落了，牵牛花和菜豆在发出两片芽瓣后终于开始长出其他的叶子来。在修剪花凋落后的小枝时，我注意到了这只蜂窝，仔细一看，顶多只有大拇指盖般大，窝巢的修建也就是刚刚开始。一只黄色的、看上去十分强壮的蜜蜂，正紧紧地扒在上面忙碌着。

发现这只蜜蜂，我便把正在院子里玩耍的孩子们叫过来，指给他们看。对在城市里长大的孩子来说，像蜜蜂这样的东西还是很稀罕的。大孩子学过有关蜜蜂毒性厉害的知识，便一一讲述着并告诫和吓唬下面的还什么都不懂的年幼的孩子。我想起了自己儿时，由于惹恼了蜜蜂而被扎了耳垂，把三七草的叶子揉碎后涂抹的往事。那时还没有人知道可以抹氨水。

总之，在这样的地方有一个蜂窝是很危险的，想把它捅掉。但考虑到还是在蜜蜂不在的时候比较安全，所以那天没有去动它。

自那以后过了四五天，我全然把这事忘了。一天早晨，孩子们去了学校，我顺便到院子里时又想起了这件事，于是去看了一下。蜜蜂和前些日子一样，身体倒挂着紧贴在蜂巢的下部正工作着。这个蜂窝大约有二十多个六棱形蜂窝孔，蜜蜂正忙着将其中的一个窝孔接长。它用下颚衔住六棱柱形内壁的一端，一圈一圈地转着，于是孔壁便延长了2毫米左右。新延长的部分格外鲜明，与已变成黑褐色的上方部分明显不同。

一圈孔壁延长后，蜜蜂进一步稳稳地调整一下身姿，然后小心地把头伸入刚做好的孔穴中。它非常小心地慢慢地卷曲着身体钻进去，直到头部看不见，但不一会儿又把身体抽出来，好像是在确认孔穴的大小之后才放下心来。紧接着又开始下一个窝孔的工作。

我长到这个岁数，还不曾仔细地看过蜜蜂的这般举动，当在一种强烈的好奇心的驱使之下目睹着这一切时，我再也不忍心去摧毁这只小昆虫的精妙的工作了。

从那以后，每当去院子时，就会特意去看一下，很少有蜜蜂不在的时候。每看一次，就会感到六棱柱形的巢壁在不断地扩大。

有一次，我看见在蜜蜂的下颚积满了灰色的泡沫状物体。而且，有时不再做扩大巢壁的工作，而是把头伸入孔穴中，做着内部的工作。但是我不明白，它那是出于什么目的，在里面忙着什么。

后来，我因为工作缠身，暂时把蜜蜂的事忘了。大概过了有半个月吧，一天，我突然想起来又到院子里去看了一下，蜜蜂不见了。不仅如此，蜂窝的工作与以前相比，也似乎没有任何进展。这不仅使我感到意外，同时还有一丝淡淡的寂寞。

自那以后，蜜蜂再也没有出现过。是什么原因呢？我作了各种各样的猜想，是被大街上的近邻的孩子们捕捉去了吗？还是被我所知道的自然界的敌人杀害了呢？但是，又似乎觉得蜜蜂在一个遥远的地方，迷失于一家陌生的院子的树丛中，在漫无目标地飞着。

当好友去世，我一个人独自走在街上时，常常会忽然真切地觉得好友现在也正同样走在东京的某个街头上，感到一种无法形容的寂寞。而这时，我在头脑中描绘着类似这只蜜蜂的幻影。在耀眼的阳光下，闪闪飞舞着的蜜蜂的幻影，使我不禁感到一种莫名的寂寞。

一天，在和S说起什么的时候，我对他说起了这件事，S作出了和我完全不同的解释。他说，蜜蜂是因为地方不好而放弃了那里，转移到别处去了，他这么说，也许是这样的。的确，这两侧面临着宽阔的空地的篱笆，不时受到风吹雨淋，还有人频频接近，对蜜蜂来说不是一个很合适的地方。但是，蜜蜂凭借自己的本能或智慧，经过判断而选定的地方，却又中途放弃转移别处，真的是否有这样的可能，这

还须向专家请教。

如果S的判断是正确的，那么也就是说，我在自己的想象中，硬将一只可怜的蜜蜂杀死，然后以它的死为题作一首小诗来玩味自己轻淡的感伤情调。但是不管怎样，我不禁对S以轻率的推理而破坏了我的幻想抱有一丝不满。而且感到，即使在这样一件小事上，也会产生截然不同的乐观者和悲观者吗？

今天，我又来到院子里看了看，在紧挨着蜂窝的上方，漏斗网蛛在那儿织上了网，上面脏兮兮地积满了枯叶和灰尘。虽说是一个蜂窝，但同样给人一种人去楼空的荒凉感。就在蜂窝的对面，一棵红彤彤的美人蕉正在怒放，更加显出蜂窝的凄凉。

我打算姑且就这样将这个蜂窝一直搁到明年的夏天。我似乎有一种预感，到了明年，也许在这个旧蜂窝上会有什么事发生呢。

（《科学和科学家的故事》岩波书店 2000.6）

5 练习答案

(一)

1. どきとした(ぎよとした)
2. 大雨が降り出した
3. ひそひそ話している
4. 嬉しそうな顔をしている
5. 地面が濡れている
6. はらはら
7. にやにや
8. 少し遅れると電話してきたが
9. 別に信用しない
10. 穴が開いている

(二)

1. a
2. b
3. d
4. c
5. a
6. d
7. a
8. b
9. c
10. d

(三)

1. 「こ」系列の指示詞には、程度が低い意、場合によっては軽蔑の意を表わす働きがある。ここでは、田舎ならごくありふれたことでも自然から離れた都会で育った子どもは珍しいことになるというニュアンスを表わす。
2. 途中で脱線しかかった話を、本筋のほうに戻す。
3. 風雨に晒されず、樹木が多く、人があまり来ない場所。
4. 「でも」を使うと、必ずしもそれに限定しない意を表わす。婉曲表現の一種とも考えられる。
5. 蜂がいなくなったことを死んだり迷ったりしたと推測するから。
6. 蜂が無事で、来年はこの巣に戻ってくるのではないかという期待。

(四)

1. 勉強が身に入るようになって半年、彼の實力は目に見えて伸びてきた。
2. 息子が東京の大学に入って半年になるが、何の連絡もない。無事に暮らしているだろうと、何度も強いて自分に安心させようとしたが、とうとう不安に駆られてわざわざ東京へ出かけた。
3. あの小国は大国の侵攻を数日後控え、徹底抗戦の構えを見せている。
4. 彼は何らかの情報をもたらしてくれるだろうと期待していたが、自分にはまるでわからないといわれ、すっかり期待が外れた。もしや、彼はわざと隠しているのではないかと思った。
5. 普段、仕事が忙しいから何となく気が紛れるが、休日には異国で生活する寂しさが身にしみる。
6. あのおばあさんはかなり金を溜めているといううわさだ。しかし、誰も信用しない用心深い性格で、銀行にも預けないし、何らかの方法で利息を生ませることも考えないらしい。
7. 卒業を半年後に控えて、彼は就職するか、大学院に進むか、それとも外国に留学するか、まだ迷っているらしい。この分では、しばらく当てもなくアルバイトをするかもしれない。

8. 金に絡む話だと、彼はいつもああなる。今度の出来事はよく彼の一面を覗かせている。
9. まぶしい日差しの中を、飛行機がきらきら機体を光らせながら飛んでいる。
10. 初めて氷を踏んだという彼は、まるで壊れ物を踏んでいるように、そろそろと歩いている。
11. この看護婦さんはいかにも無造作に塗り薬を擦り付けるように見えるが、痛みを感じたことはない。反対にもう一人の看護婦さんは、そっと付けるように見えるが、時々綿棒が傷口に触れて痛む。
12. テレビであのニュースを見た後、何日間も戦争で死んでいく子どもたちの様子がありありと目に浮かび、かわいそうで仕方がなかった。

6 扩展阅读

赤 蛙

島木健作

寝つきりに寝つくようになる少し前に修善寺へ行った。その頃はもうずいぶん衰弱していたのだが、自分ではまだそれほどとは思っていなかった。少し体を休めれば、じきに元気を回復するつもりでいた。温泉そのものは消極性の自分の病気には却ってわるいので、私はただ静かな環境にたったひとりであることを欲したのである。修善寺は前に一晩泊ったことがあるきりで、べつにいい所だとも思わなかったが、ほかに行くつもりだった所が、宿の都合がわるいと断って来たので、そこにしたのだった。

宿についた私はその日のうちにもうすっかり失望して、来たことを後悔しなければならなかった。実にひどい部屋に通されたのだ。それは三階の端に近いところで、一日じゅう絶対に陽の射す気づかいはな

く、障子を立てると昼すぎの一番明るい時でも持って来た小型本を読むのが苦勞だった。秋もまだ半ば頃なのだが山の空気は底冷えがする。熱も少しあるらしく、冷いやりとした風が襟もとや首すじにあたるごとにぞくぞくする。それに風のかげんで廁臭がひどくて堪えられぬ。誰でもそうだろうが、私も体が弱るにつれて、それが悪臭なら無論、芳香であっても、すべてのにおいというにおいには全く堪え性がなくなってしまうのである。それで私はどうしても障子を立てて、一日その薄暗いなか閉じこもっていなければならなかった。

私は時々立って障子を開けて、向い側の陽のよくあたる明るい部屋部屋を、上から下まで、羨しそうに眺めやった。広い縁側の長椅子の上に長々と横になっている人間たちを眺めやった。客はそう混んでいるとも思えなかった。私はいきなり飛び込んだ客ではなくて、予め手紙で問い合わせしてから来た者でもある。私は女中を呼んで部屋を代えることを交渉したが、少しも要領を得なかった。

一人客の滞在客という、こういう宿にとっての、一番の嫌われもので、私はあったのだ。明いているいい部屋は幾つあっても、それらは女連れなどで来て遊んで帰る者たちのためにだけ取ってある。その春放送局の用事で福島県の農村地方を廻った時は、土地の人にある温泉地へ案内されたが、靴を脱いで上へあがってから泊るのは一人だとわかると、いきなりそんなら部屋はないといわれ、帚で掃くようにして追い立てられた時のことを思い出した。軍需成金共が跋扈していて、一人静かに書を読まうとか、傷ついた心身を休めようとか、そういうようなものは問題ではないのだ。そうかと思うと一方にはまた温泉組合の機関雑誌というものがあり、「我々温泉業者も新体制に即応し、国民保健の担当者たることを自覚し……」などと書いて、我々の所へも送って来たりしているのである。

つまりらぬことに腹は立てまい、ちょっとしたことにもものぼせるのは自分の欠点だ、怒気ほど心身をやぶるものはない、この頃は特にそう思い思いして来ている自分なのだが、怒りがムラムラと発して来てど

うにもならなかった。この堪え性のなさもやはり病気が手伝っていた。無理をして余裕をつくり、いろいろ楽しい空想をして来たのにと
 思うと、読むために持って来た本を見てさえいまましくてならない。不機嫌を乗り越して毒念ともいべきものがのた打って来た。食欲は全くなかった。時分どきになると、無表情な無愛想な女が、黙っ
 てはいつて来て、料理の名をならべた板を黙って突き出す。こっちも
 黙って、ろくすっぽう見もしないで、そのなかのどれかこれかを、指
 の頭でおす。

新しい宿を探して見ようという気力さへなかった。そうかといって
 さっさと引きあげて帰るという決断力もなかった。

自然、飯の時のほかは外に出ているという日が多くなった。^{のりより}範頼の
 墓があるという小山や公園や梅園や、そんな所へ行ってその日だま
 りにしゃがんでほんやり時を過して帰ってくるのだ。

或る日私は桂川の流に沿って上って行った。かなり歩いてから
 戻って来て、疲れたのでどこか腰を下ろす所と思っていると、川をす
 ぐ下に見下ろす道ばたに、大きな石が横たわっているのを見た。畳半
 分ほどの大きさでしかも上が真っ平な石である。私はその上に腰をか
 けて額の汗をぬぐった。あたりには人影もない明るい秋の午後であ
 る。私は軽い貧血を起したようなほんやりした気持で、無心に川を見
 下ろしていた。川は兩岸から丁度同じ程の距離にあるあたりが、土が
 むき出して洲になっている。しかしそれは長さも幅も、それほど大き
 なものではない。流れはすぐまた合して一つになっている。こっちの
 岸の方が深く、川のなかには大きな石が幾つもある、小さな淵を作
 ったり、流れが激しく白く泡立ったりしている。底は見えない。向う
 岸に近いところは浅く、河床はすべすべの一枚板のような感じの岩
 で、従って水は音もなく速く流れている。

ほんやり見ていた私はその時、その中洲^{なかす}の上にふと一つの生き物を
 発見した。はじめは土塊^{つちくれ}だとさえ思わなかったのだが、のろのろとそ
 れが動きだしたので、気がついたのである。気をとめて見るとそれは

赤蛙だった。赤蛙としてもずいぶん大きい方にちがいない、ヒキガエルの小ぶりなのぐらいはあった。秋の陽に背なかを干していたのかも知れない。しかし背なかは水に濡れているようで、その赤褐色はかなりあざやかだった。それが重そうに尻をあげて、ゆっくりゆっくり向うの流れの方に歩いて行くのだった。赤蛙は洲の岸まで来た。彼はそこでとまった。一休止したと思うと、彼はざんぷとばかり、その浅いが速い流れのなかに飛びこんだ。

それはいかにもざんぷとばかりというにふさわしい飛び込み方だった。いかにも跳躍力のありそうな長い後肢が、土か空間かを目にもとまらぬ速さで蹴ってピンと一直線に張ったと見ると、もう流れのかなり先へ飛び込んでいた。さっきのあの尻の重そうな、のろのろとした、ダルな感じからはおよそかけはなれたものであった。私は目のさめるような気持だった。遠道に疲れたその時の貧血的な気分ばかりではなく、この数日來の晴ればれしない気分のなかに、新鮮な風穴が通ったような感じだった。

赤蛙は一生懸命に泳いで行く。彼は向う岸に渡ろうとしているのだ。川幅はさほどでもないのだが、しかし先に言ったように流れは速い。その流れに逆らうようにして頭を突っ込んで泳いで行く赤蛙はまん中頃の水勢の一番強い所まで行くと、見る見る押し流されてしまった。流されながらちよつともがくように身振りをしたかと思うと、それは一瞬、私の視野から消えてしまった。波に吞まれてしまったのだ。私ははッと思って目をこらした。するとやがてそれは不意に、思いがけないところに、ぽっかりと浮いて、姿をあらわした。中洲の一番の端——中洲が再び水のなかに没し去ろうとするその突端に辛うじて這い上ったともいうような恰好で、取り附いているのだった。

赤蛙は岸へ上った。そこで一休みしていた。私にはその大きな腹が、喘いだ呼吸に波打ってでもいるような気がした。やがて赤蛙はのたりのたり歩きだした。そして、元の所へ——私が最初に彼を発見し